

## 第2節 愛鷹山古墳群の被葬者集団とその生産基盤

## —駿河東部地域の大型群集墳—

藤村 翔

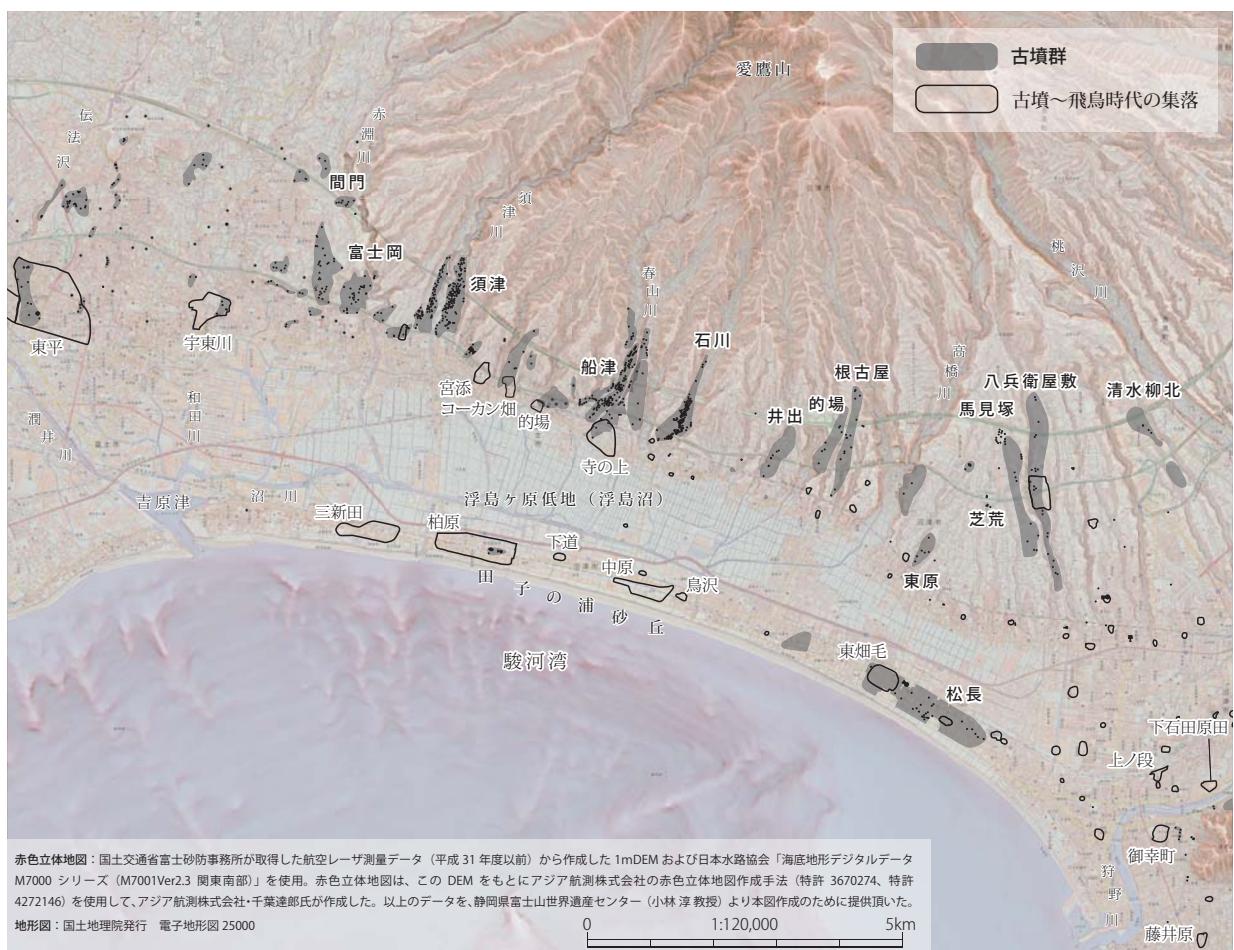
## はじめに

本書で報告した須津古墳群は、富士山南東に位置する休火山である愛鷹山の南西麓に立地する。愛鷹山の山体には、およそ10万年前の火山活動の停止以後、浸食により深い谷がいくつも刻まれ、その南方に広がっていた浮島沼（潟湖、ラグーン）に向かつて張り出すように丘陵や河岸段丘が発達した結果、南麓の谷部や丘陵上には古墳時代後期から飛鳥時代にかけて、総数1,000基以上を数える多数の古墳群が並立して展開することとなった。

令和3年度は本書の整理作業と並行し、隣接自治体である沼津市との共同事業として「令和3年度

沼津市・富士市連携 埋蔵文化財活用 特別展示・講演会『愛鷹山に眠る開拓者たち—東海最大級の古墳群と地域の再生』が企画され、両市の市境付近に広がる愛鷹山南麓の各古墳群について、お互いのもう情報を改めて整理して持ち寄る形で再構築していく作業を経ることで、改めて愛鷹山の古墳群を総体として評価する機運が担当者間で高まった。

本節では須津古墳群の範囲からやや視野を広げ、愛鷹山周辺に広がる大型群集墳の一角として捉え直すことで、東海地域の最東端に立地する当該古墳群の特質と想定される生産基盤について検討したい。



第97図 愛鷹山南麓周辺の古墳群と関連集落の分布

## 1 愛鷹山古墳群の概要

### (1) 愛鷹山古墳群とは

**範囲と規模** 愛鷹山古墳群とは、古墳時代後期後半から飛鳥時代にかけて愛鷹山の南麓周辺に展開した古墳群の総称である（第97図）。西は愛鷹山西麓と富士山麓の境界を流れる赤淵川周辺、東は桃沢川までの範囲の河岸段丘や丘陵上に古墳群の顕著な広がりが認められ、沼津市教育委員会刊行の発掘調査報告書や『沼津市史』（菊池2005）などでは1,000基を超えるとの認識が共有されていた<sup>(註1)</sup>。

今回、沼津市・富士市連携事業の準備作業の中で、改めて現状で両市によって把握されている古墳数を数えたところ、包蔵地登録数で811基（2022年3月現在）<sup>(註2)</sup>となることが判明した。そのなかには包蔵地範囲のみで捉えられた古墳群も含むので、実際の数はやはり『沼津市史』などで指摘されていた通り、1,000基以上になることが推定される。

**「古墳群」の概念** 古墳群の概念設定については、研究者により未だ意見の分かれる部分ではあるが（藤村2018b）、その研究の目的に沿って群の規模を使い分けるべきという点については、共有されるところであろう。今回の連携事業や本稿では、愛鷹山麓から浮島沼ラグーン地帯に地盤をおいた地域集団の動向を明らかにすることを第一義とするため、その地理的恩恵を享受したであろう古墳のまとまりを、広義の古墳群として捉えたい。そうであれば、須津や船津、石川などの古墳のまとまりは「大支群」（鈴木敏1988ほか）などの用語をあてるべきかもしれないが、ここではそれを狭義の古墳群として従来の呼称を踏襲する。

これまでの分布・発掘調査の蓄積からみれば、南西麓の須津川、春山川、石川流域にそれぞれ展開した須津古墳群、船津古墳群、石川古墳群に全体の約6割の古墳が集中しており、古墳建築集団の生活圏を考える上でも示唆的である。

### (2) 古墳群成立前史

**浮島沼ラグーン沿岸の前・中期古墳** 古墳群成立以前の古墳時代前期には、愛鷹山南麓から浮島沼沿岸部にかけて高尾山古墳（前方後方・62m）や神明塚古墳（前方後円・53m）、浅間古墳（前方後方・

91m）、東坂古墳（前方後円・60m）といった単独立地の大型の首長墳が築かれたが、中期になると間門松沢1号墳（楕円・25m）や道尾塚古墳（不明）、船津ふくべ塚古墳（前方後円？・65m）がみえる程度で、古墳の内容や規模が大きく縮小する。

後期前半には再び浮島沼周辺において古墳建築が活発となり、天神塚古墳（前方後円？・51m）、子の神古墳（前方後円？・64m）、長塚古墳（前方後円・75m）、山の神古墳（前方後円・41m）、琴平古墳（円・30m）などの中小の前方後円墳や円墳が小地域単位で並立する状況となる。

その後、後期後半以降に横穴式石室を主体部とする群集墳の建築が愛鷹山麓周辺で広がるが、その中には、前期や中期、後期前半頃の古墳と立地を近しくする群も存在する。

**古墳群と「始祖墓」** 群集墳の墓域設定に際し、前・中期の大型首長墳の存在がどのように意識されたのかについては、擬制的同族関係の「結合の要」（白石1973）や「始祖墓」（土生田2010）といった概念によってその評価が試みられている。

当地域では特に浅間古墳と須津・船津古墳群（第3図、本書3頁）、東坂古墳と比奈古墳群、神明塚古墳と松長古墳群というように、前期古墳を意識した立地をとる群集墳も散見されており、目に見える氏族系譜・集団結合の象徴として、大型の前期古墳が群集墳被葬者集団によって利用された蓋然性は高い。

## 2 横穴式石室からみた被葬者集団

### (1) 石室規模からみた集団の性格

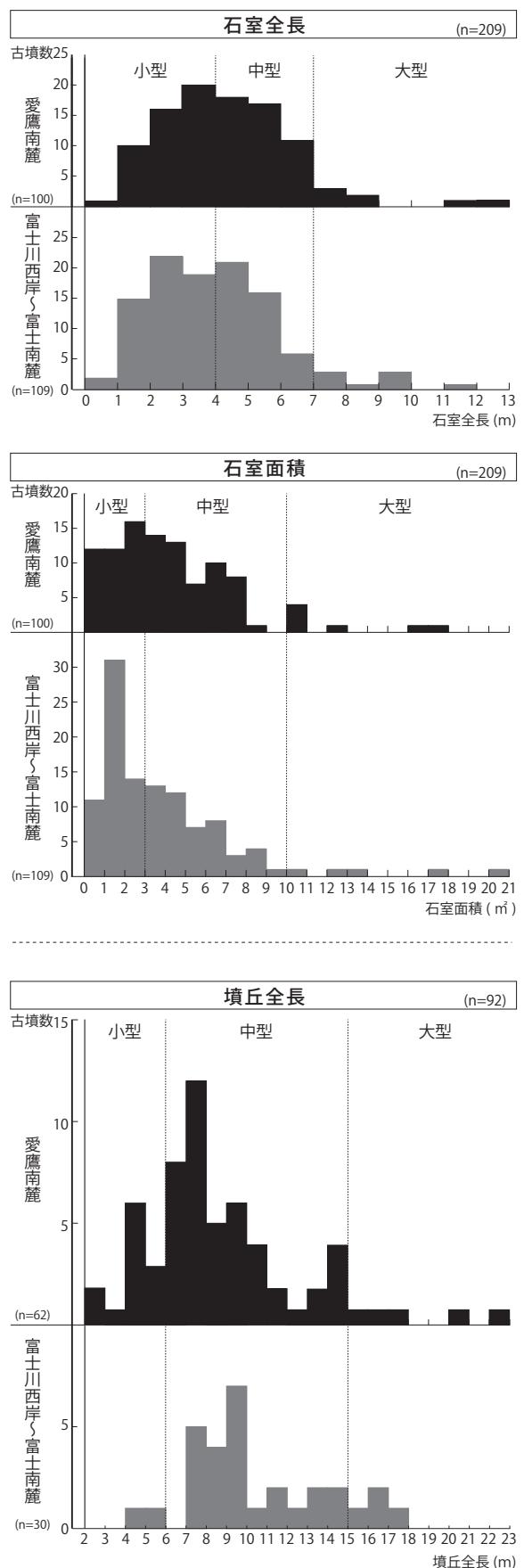
**研究動向** 駿河東部地域の無袖石室の階層構造については、石室全長10mを超える大型の無袖石室を頂点として、その下に中型石室や7世紀後半以降はこれに小石室も加わるヒエラルキーが想定されている（鈴木一2001、井鍋2003）。一方、最上位階層が同時期に複数存在する点も重要であり（菊池2010）、少なくとも6世紀末頃（TK209型式併行期）には10m前後の大型石室と4～6mの中型石室の間に階層構造が生まれ、後者はさらに副葬品内容によっても分化するが、こうした階層構造が、各小地域の古墳群の集団単位で完結すると考えられる（藤村2016・2018c）。

**古墳の規模による階層分化** ここではかつて井鍋誉之氏によって行われた由比～箱根山西麓の61例の横穴式石室の規模による定量分析の知見（井鍋2003）を確認するため、富士川西岸から愛鷹山南麓周辺までの新出資料を加えた横穴式石室を対象に、石室全長（前庭部含む）と石室面積（奥壁幅×石室全長）（ともに資料数209例）、さらに墳丘全長のヒストグラム（資料数92）を作成した（第98図）。

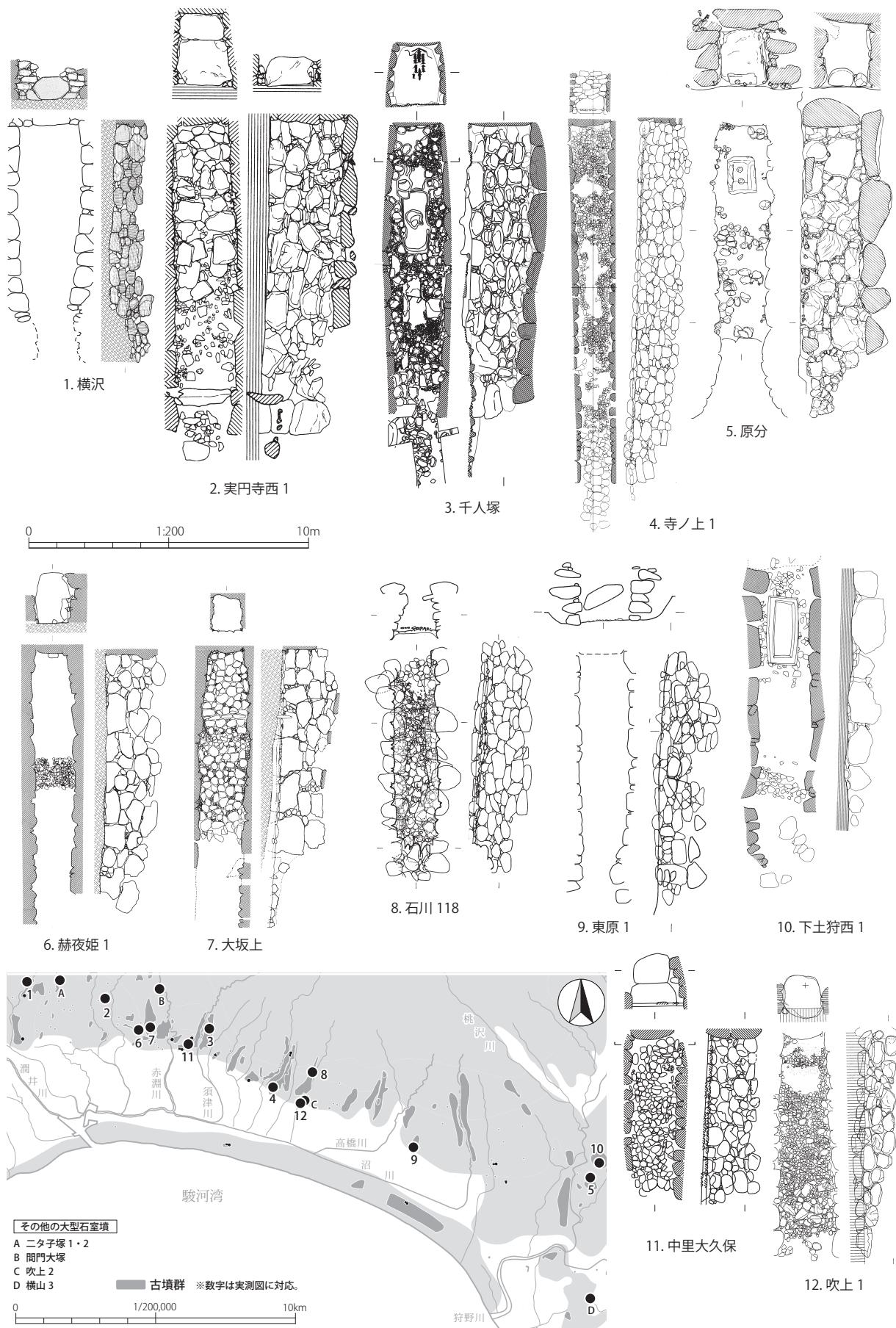
ここから、上位のグループについては概ね石室全長7m、同面積10m<sup>2</sup>を超えるものを大型石室として抽出することができる。また墳丘全長では15mを超えるものが上位グループとして抽出できる。この値で抽出した資料は、概ね墳丘全長、石室全長、石室面積の3要素でそれぞれ大型に位置づけられるので、この境界値の設定は妥当であると考える。一方、小型～中型石室の区分は便宜的な意味合いが強いが、ヒストグラムの傾向から、石室全長4m、石室面積3m<sup>2</sup>、墳丘全長6mにて境界値を設定した。ヒストグラムの形状からは、いわゆるピラミッド形ではなく、小型上位～中型の多い壺形分布を示す点が指摘できる。ここから、この地域の横穴式石室を築造した集団が、大型石室を築造する少数の指導者層の下、小型上位～中型石室を築造した中間層が多く古墳を築くことで、群集墳を形成していたことが窺える。石室全長2m、同面積2m<sup>2</sup>以下の最小クラスの小型石室は、潤井川東岸の伝法古墳群のほか、富士川西岸の妙見古墳群や山王古墳群といった富士郡家周辺と、郡家から富士川を挟んで対岸に顕著に分布することから、8世紀初頭前後の官人層の個人墓と考えられる。

**古墳群を単位とした階層構造** 指導者層が築いた大型石室の分布をみると、特定地域に集中せず、富士南麓～黄瀬川流域の各地に分散する状況が明瞭である（第99図）。基本的には、各古墳群単位で、それぞれの集団をまとめる指導者が存在したとみるのが妥当であろう。

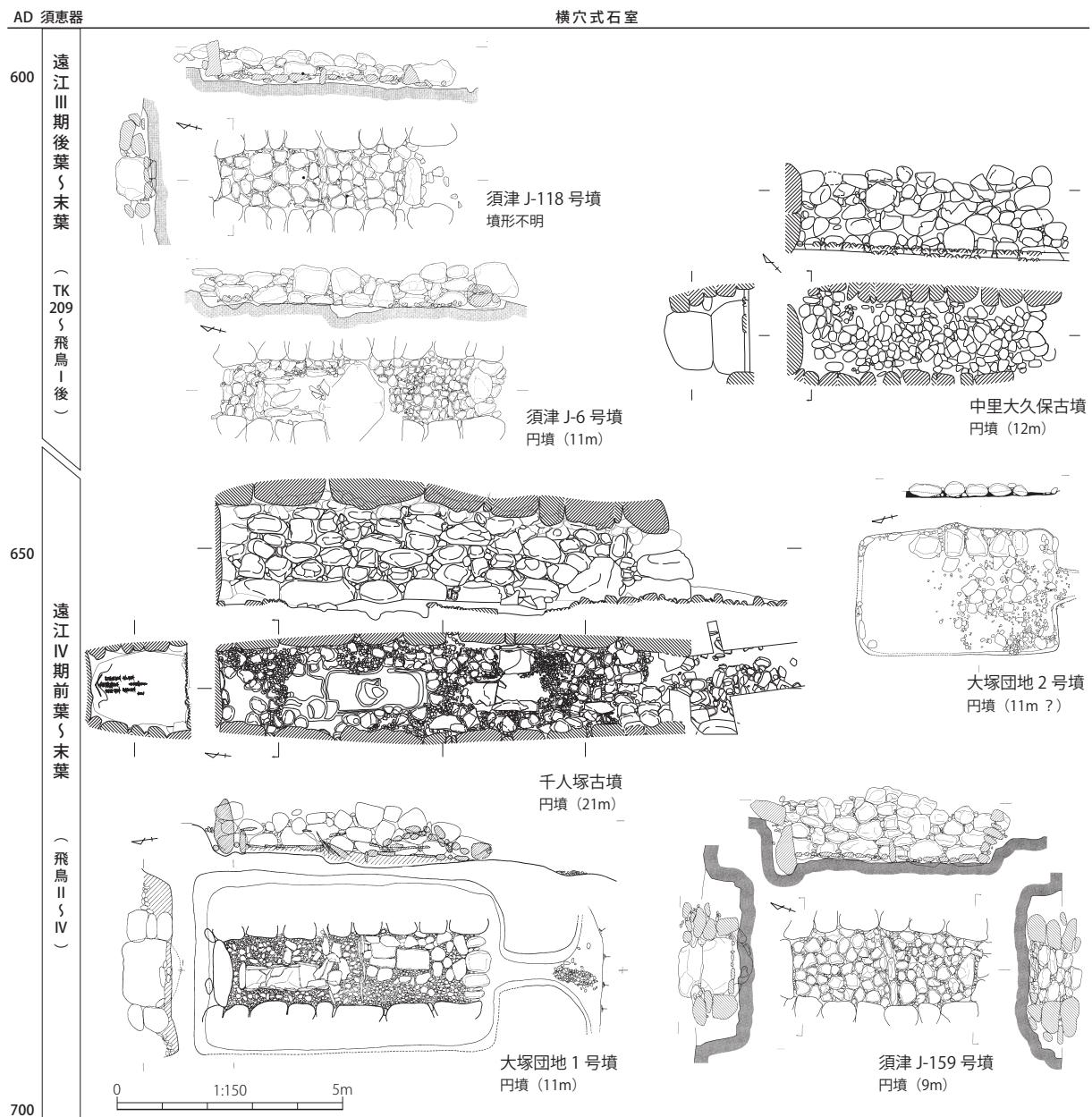
須津古墳群や船津古墳群の石室変遷図からは、こうした階層構造が少なくとも2～3世代に渡って再生産されていたとみてよい（第100・101図）。その傾向は、富士川～富士南麓と愛鷹山南麓で大きくは変わらないとみられる<sup>(註3)</sup>。



第98図 横穴式石室墳の法量ヒストグラム  
(富士川西岸～愛鷹山南麓)



第99図 愛鷹山古墳群と周辺の大型横穴式石室



第100図 須津古墳群の横穴式石室

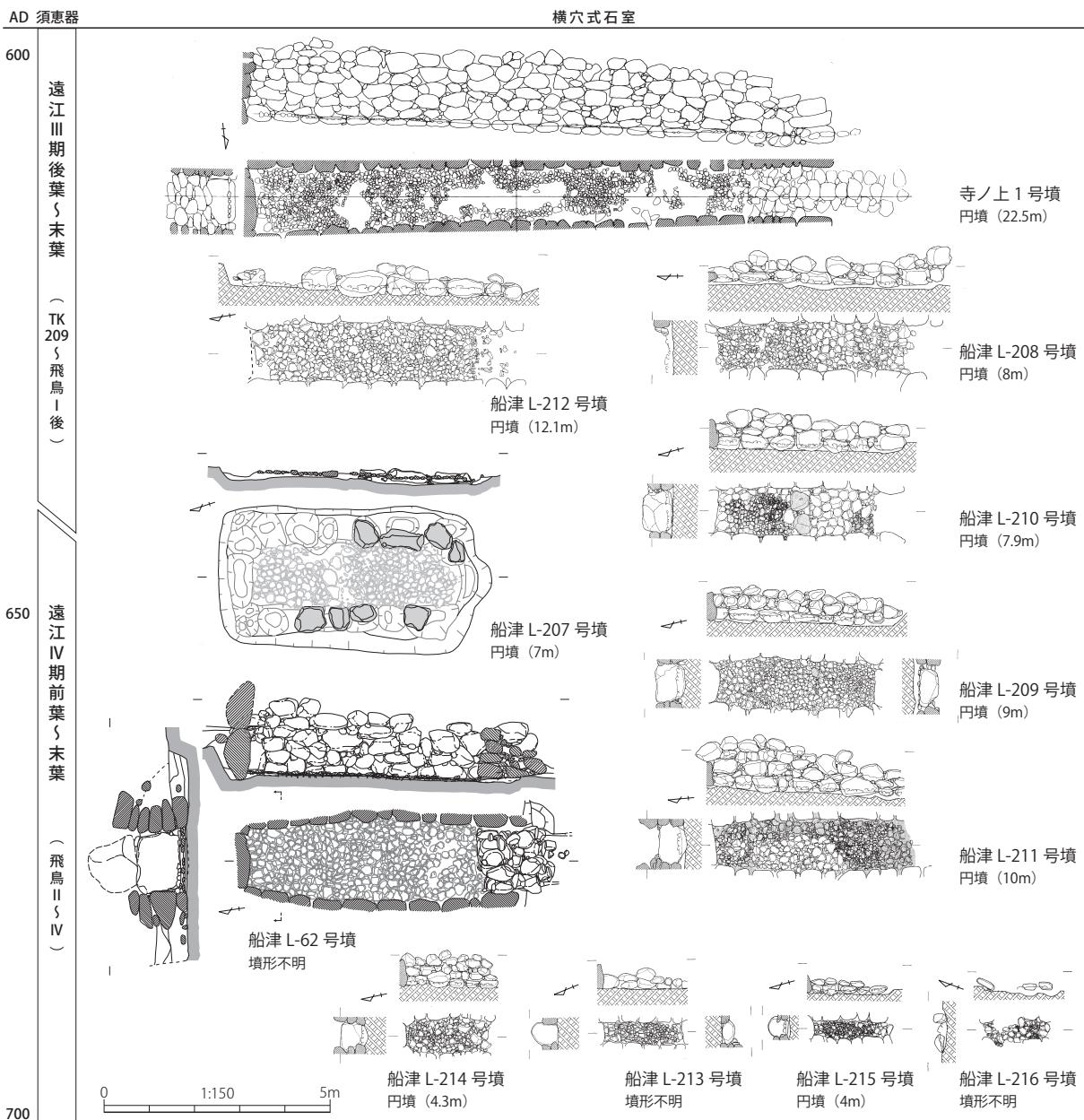
## (2) 平面企画からみた集団の性格

**集団間の関係を探る** それでは、上記の検討から導かれた並立する階層秩序を有した各古墳群の集団は、互いに閉鎖的な集団であったのだろうか。石室平面企画から導かれる回答は、否、である。

当地域の横穴式石室の床面平面図を比較すると、奥壁の幅や胴張りの具合によって、同じ無袖形でありながら、一定の平面企画が存在することが窺える(第102・103図)。本来であれば石室長まで同じ割合で合致するものこそ共通した平面企画と言えるのかもしれないが(松崎2001)、無袖石室で対象とする石室長は、羨道的な空間も含めてのものであり、先

述したような階層性や埋葬人数などによっても流動性が高くなることが想定されることから、ここではより幅をもった設計企画の抽出を目指した。

**狭長形** 狹長形とした平面類型は、井鍋誉之氏が「狭長な無袖式石室」として、関東地域の太平洋沿岸に分布が拡がる点が注目された形式である(井鍋2003、植山2020)。奥壁幅に対して開口部幅が直線的に狭まる点に特色があり、おそらくは1尺=0.36cmで設計した際に、開口部幅を1尺分狭くしたものと考えられる。船津寺ノ上1号墳を基本型として、3/4サイズのものが、吹上2号墳、松長6号墳、東原5号墳、清水柳北2・3号墳で採用される。

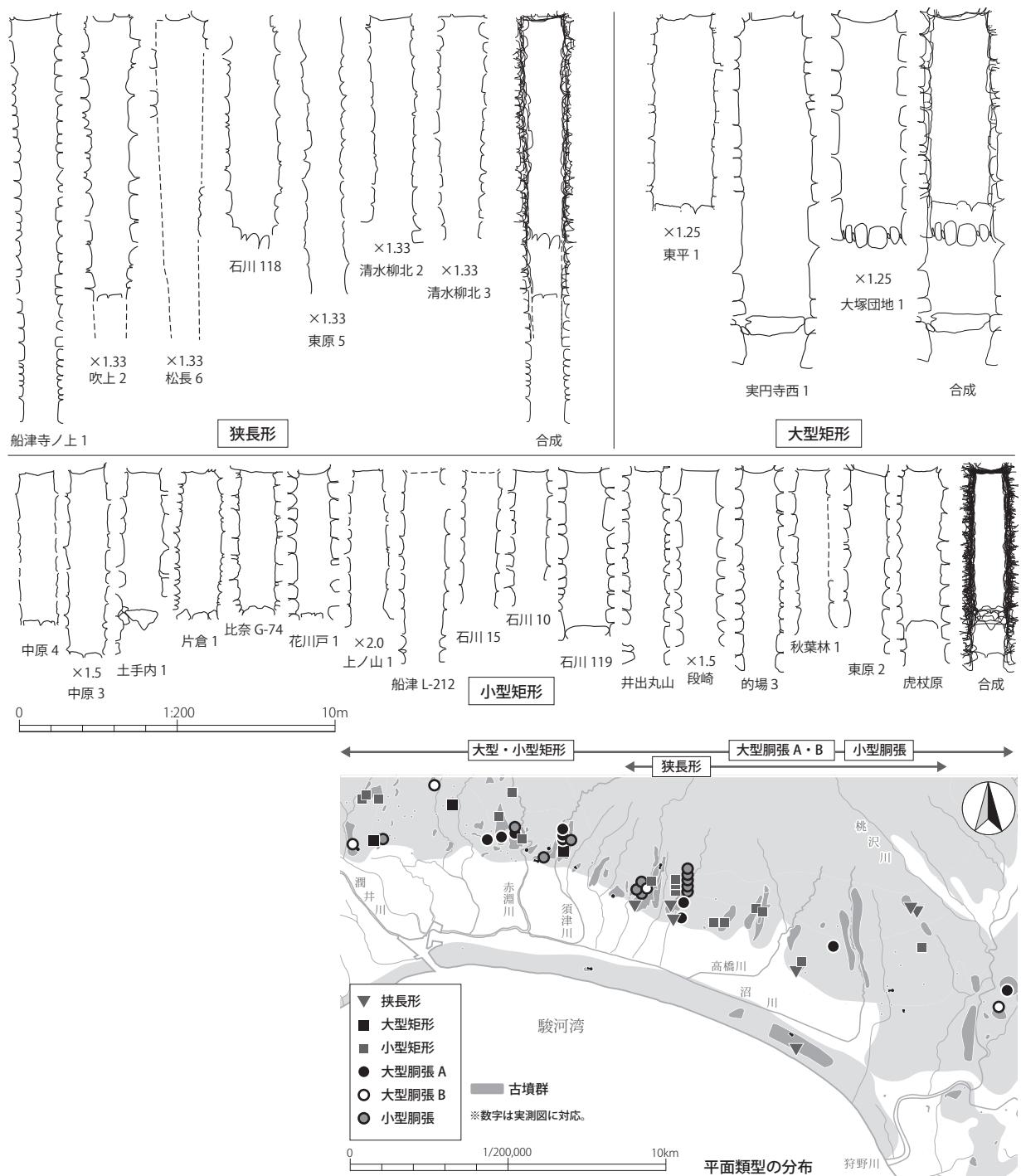


第101図 船津古墳群の横穴式石室

**矩 形** 矩形とした平面類型は、鈴木一有氏が「駿東系石室」とするもので（鈴木一 2017）、開口部付近に段構造を伴うものも多い。平面形が直線的な矩形（長方形）となり、大型と小型に細分できる。

大型のものは実円寺西1号墳を基本型として、4/5サイズが東平1号墳、大塚团地1号墳で採用される。小型のものは中原4号墳や虎杖原古墳などを基本型に、2/3サイズが中原3号墳や段崎古墳、1/2サイズが上ノ山1号墳などで採用される。これらも1尺 = 0.36cmとすれば、奥壁幅が実円寺西1号墳が5尺、東平1号墳が4尺、中原4号墳が3尺、同3号墳が2尺、上ノ山1号墳が1.5尺となっている。

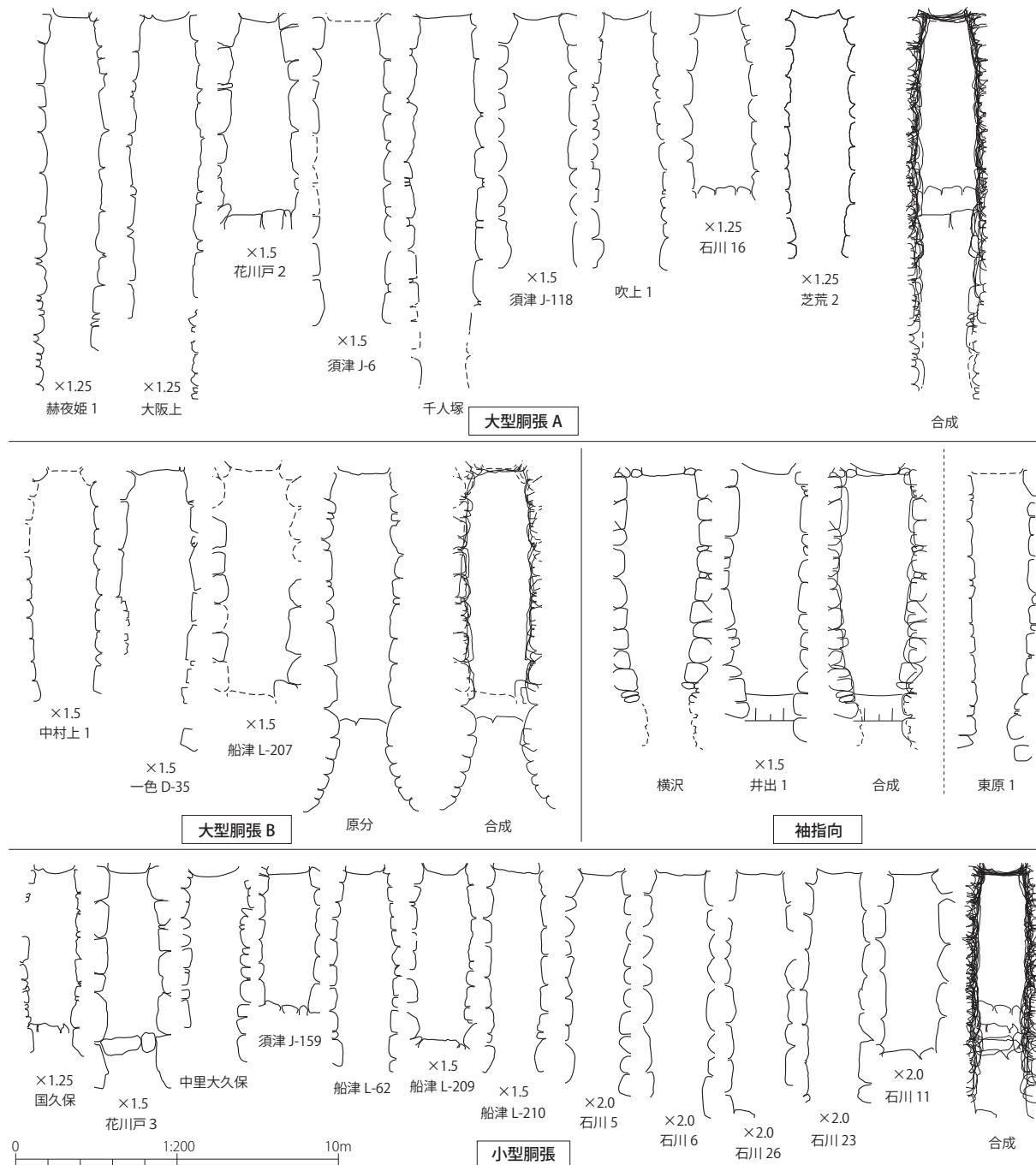
**胴張形** 胴張形とした平面類型は、平面形が胴張形のものである。こちらも大型と小型に細分できるほか、大型胴張についてはその形状によって、やや直線的に幅を広げるものを大型胴張A、曲線的に幅を広げるものを大型胴張Bとした。大型胴張Aは吹上1号墳や千人塚古墳を基本型として、4/5サイズが赫夜姫1号墳や大坂上1号墳など、2/3サイズが須津J-6号墳や石川16号墳などで採用される。また大型胴張Bは原分古墳を基本型として、2/3サイズが中村上1号墳や一色D-35号墳などで採用される。小型胴張は大型胴張A・Bの双方の影響を受けたとみられるものであり、中里大久保古墳や船津



第102図 横穴式石室の平面類型（1）

L-62号墳を基本型として、3/4サイズが国久保古墳、2/3サイズが花川戸3号墳や船津L-209・210号墳など、1/2サイズが石川5・6号墳などで採用される。これらも1尺=0.36cmとすれば、大型胴張Aの千人塚古墳で奥壁幅5尺、最大幅6尺となり、規模が小さくなるにつれて奥壁幅4尺（大坂上古墳、船津L-62号墳など）、3尺（須津J-6号墳、国久保古墳など）、2尺（石川5・6号墳）と減じている。

**袖指向** 袖指向とした平面類型は、一定の石室幅を有しながら、開口部付近で急速に幅を狭めるものであり、擬似両袖も含めた有袖形石室の間接的な影響のもとで設計されたとみられる当地域では特殊な類型である。横沢古墳を基本型とすれば、井出1号墳が2/3サイズとなっている。東原1号墳の石室は、後述するように近隣では廬原地域の神明山4号墳石室との類似性が注意される。



第103図 横穴式石室の平面類型（2）

**古墳群のなかの平面企画** 以上の分類から、それぞれの平面企画の採用古墳の分布をみると、近接した古墳群に企画が集中することなく、富士山麓～愛鷹山麓の広域で共有していた状況が看取される（第102図下段）。このことから、平面企画に象徴される石室の設計図や割付方法などといった石室構築に関する技術が、各古墳群の集団間の相互交流によって共有されていた状況が推定できる。唯一、狭長形が現状では春山川流域から田子の浦砂丘も含めた、桃

沢川流域までの浮島沼ラグーン周辺に集中する傾向にあるが、いずれもTK43型式併行期～飛鳥Iまでの当地域では古相の石室であり、群集墳形成の第一世代に採用されたのみとみられるが、これについても古墳群を隔てて分布することが確認できる。

墓坑の深さや裏込め礫の有無といった石室の細部の構造（菊池2010）や屍障仕切石・箱式石棺といった使用法（大谷2010b）には個別的な差異もみられるが、愛鷹山麓周辺の古墳建築集団が、石室の

構築技術とともに、無袖形石室という葬送儀礼の舞台装置に関わる大枠のアイデンティティを共有していたことが改めて確認できる。この点は、畿内地域周辺の大型群集墳において、同じ古墳群や支群内でも異なる石室形式を採用することがある状況（藤村 2021b）とは異なり、集団の結合が一層進んだ証として評価することが可能である。

### 3 副葬品からみた被葬者集団

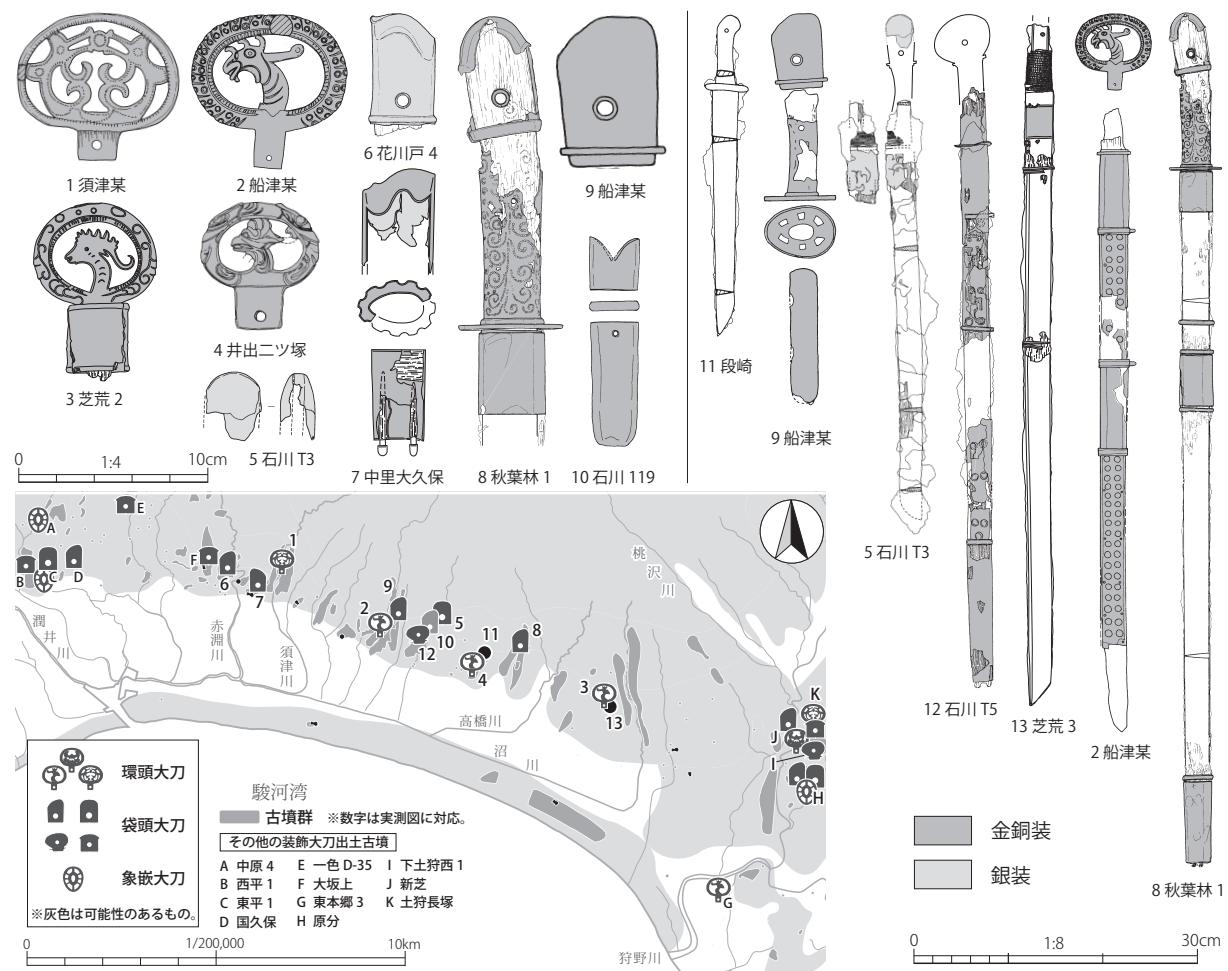
#### (1) 武器からみた集団の性格

**装飾付大刀** 愛鷹山古墳群周辺の装飾付大刀については、単龍鳳環頭大刀が東海地域の中では比較的集中する状況が指摘されているが（岩原 2005、井鍋 2006）、近年の類例増加により、圭頭大刀も目立つ大刀形式になっている（第 104 図）。ただし、井鍋氏も指摘した通り、個別の事例を俯瞰すれば、あらゆる大刀形式が 6 世紀末～7 世紀中頃に並立するという理解に大きな変更はない。

大刀形式によって表象される役割については、袋頭大刀を軍事活動、環頭大刀を外政・技術を掌握する職掌とみる見解が参考となるが（橋本 2014、内山 2018）、東海・関東諸地域の有力層においてはまず軍事が第一に重視されるという（内山 2018）。

各古墳群単位でも各種の大刀形式がみられる点を重視すれば、一つの集団内に性格や職掌が異なる人格がモザイク状に参画していた状況を推察することができるが（鈴木一 2006）、そのなかでもまず軍事的な役割が当古墳群の指導者層に期待されていたことが窺える。

**鉄 鏃** 続いて副葬鉄鎧の形式に注目すると、西部の富士川流域～愛鷹山南西麓では三角形式や五角形式などの平根系鎧を多く含む鎧群、東部の愛鷹南東麓～黄瀬川流域では柳葉式や鑿箭式、片刃箭式の尖根系鎧が多数を占める鎧群を採用する傾向があり（藤村 2018a）、鉄鎧の実戦的機能や儀礼的側面、象徴性に関わる意識には地域性がみとめられる。



第 104 図 愛鷹山古墳群周辺の装飾付大刀

一方、鉄鎌副葬率をみると、富士川流域～富士山麓では約33%（117古墳中39例）、愛鷹山麓では約56%（109古墳中61例）と後者が比較的高い割合を占めている。後述するように、両地域ともに30本以上の多量の鉄鎌を副葬する古墳が多いことを鑑みれば（第105図）、富士川流域～富士山麓の鉄鎌保有率の少なさは、8世紀の官人化した個人墓の割合が多いことに起因する可能性もある。ただ、先に見た東部の古墳により実戦的な尖根系鉄鎌が多用される傾向からは、愛鷹山古墳群周辺の集団の方が、より軍事的な役割の比重が大きかった可能性も十分に考え得る。軍事的な役割については、幅広い階層の古墳被葬者が担っていたことが副葬鉄鎌の出土傾向から推定できる。

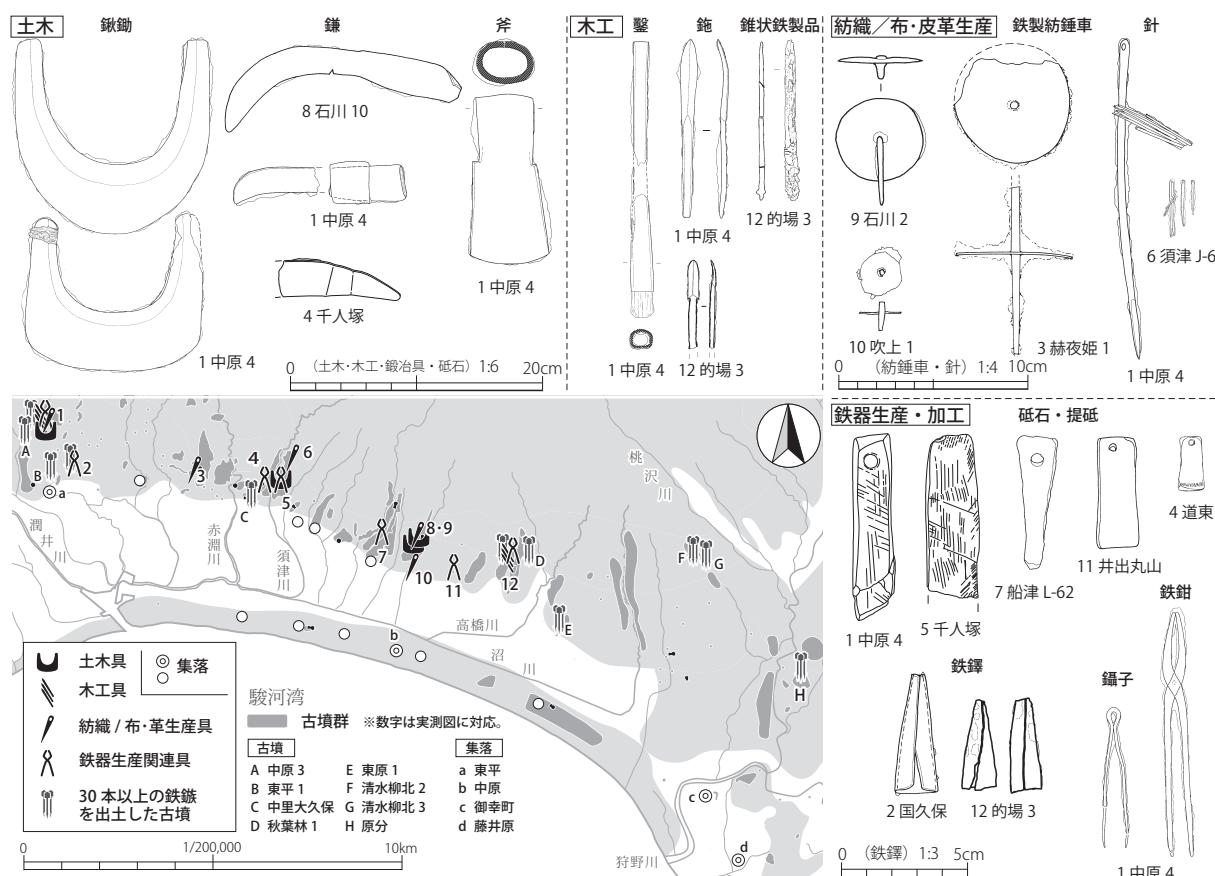
## （2）農工・生産具からみた集団の性格

**農工・生産関連具の構成** 愛鷹山古墳群の副葬品の特徴として、農工・生産具やその関連遺物が一定数の古墳に副葬される傾向がある（第105図）。

土木具は石川10号墳や千人塚古墳で鎌、木工具は的場3号墳で鉈や錐状鉄製品、紡織や布・皮革生産関連では石川2号墳や吹上1号墳で鉄製紡錘車、須津J-6号墳で針が出土する。

鉄製紡錘車は近接地域の赫夜姫1号墳でも出土している。また、鉄器生産や加工に関連する工具としては、千人塚古墳で砥石、船津L-62号墳や井出丸山古墳、道東古墳で提砥が出土するほか、鉄器製作に関連する祭祀具の可能性がある鉄鐸が的場3号墳でみられる（早野2008）。30本以上の鉄鎌が出土した古墳の分布も、近隣に鉄器製作に関わる技術者や工房の存在を推定できる要素である（尾上1993）。

**渡来系技術者の存在** 愛鷹山古墳群においてみられた農工・生産関連具の特徴は、富士山南麓において土木開発や手工業生産を主導した伝法古墳群の中原4号墳や国久保古墳でみられた構成（鈴木一2016、藤村2018c）ともよく共通しており、愛鷹山麓周辺の集団内にも、同種の技術者や彼らを束ねる指導者が存在した蓋然性は高い。



第105図 愛鷹山古墳群周辺の農工・生産関連具

また先述した鉄鐸のほか、金銅製鉢や銅鉗、装飾付ガラス玉などの渡来系装身具類の副葬状況も顕著な点を考慮すれば（第106図）、こちらも伝法古墳群と同様に、集団内部に渡来系技術者が一定数存在した可能性がある。

愛鷹山古墳群の集団は、渡来系技術者を含む多様な人材によって構成され、愛鷹山麓に広大な墓域や馬牧（大谷2019）、そして後述する砂丘上の開発によって、その地に手工業生産の拠点となる大集落群を創出していったと考えられる。

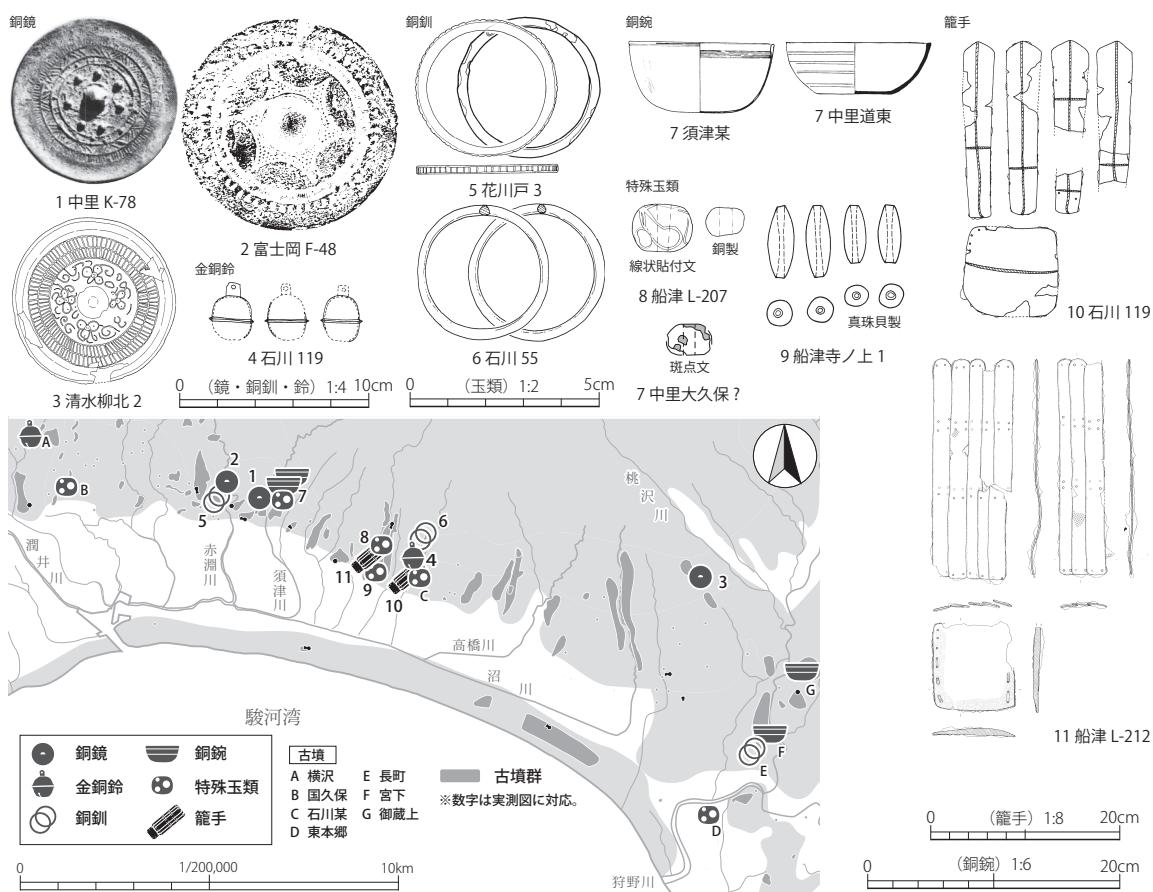
#### 4 浮島沼ラグーンの開発と愛鷹山古墳群

##### (1) 田子の浦砂丘上の集落群と中原遺跡

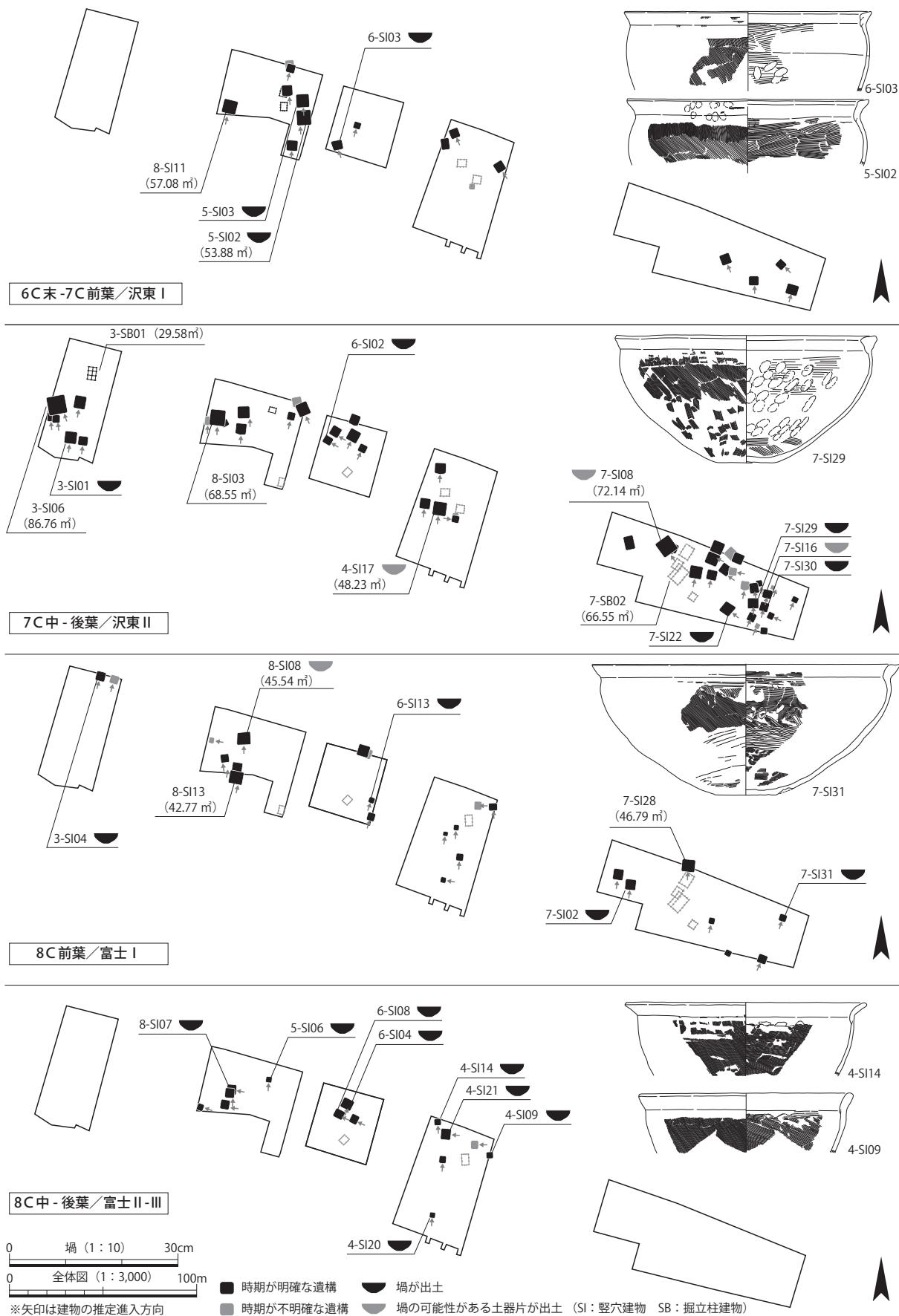
かつて筆者は、古墳時代後期後半から飛鳥時代に田子の浦砂丘上に一直線上に並ぶ三新田遺跡、柏原遺跡、下道遺跡、中原遺跡、鳥沢遺跡、東畠遺跡などの集落が、同時期の愛鷹山南麓の集落よりも質・量ともに上回ることから、それらを愛鷹山南麓の船津古墳群や石川古墳群などの大型群集墳の被葬者集

団の母体集落に比定したことがある（藤村2013）。ただし、当時は中原遺跡の調査報告書が刊行される前であったため、その裏付けを十分に示すことができなかった。ここでは、中原遺跡の集落構造や生業活動を検討することで、田子の浦砂丘上の集落の特質を示したい。

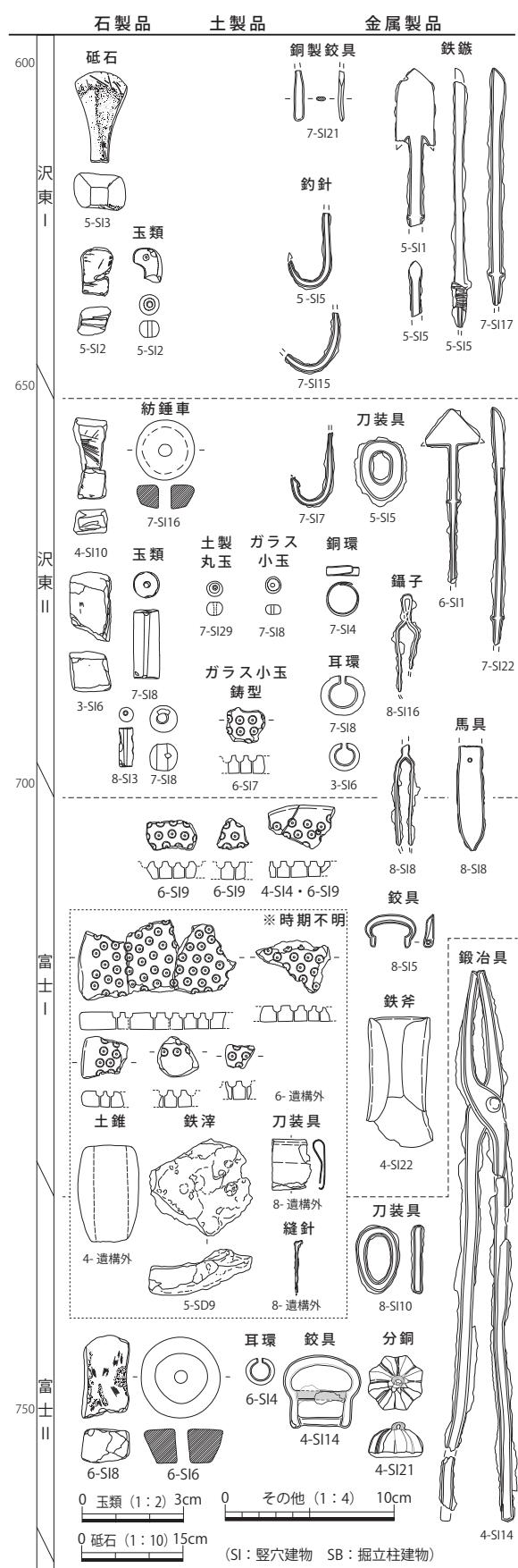
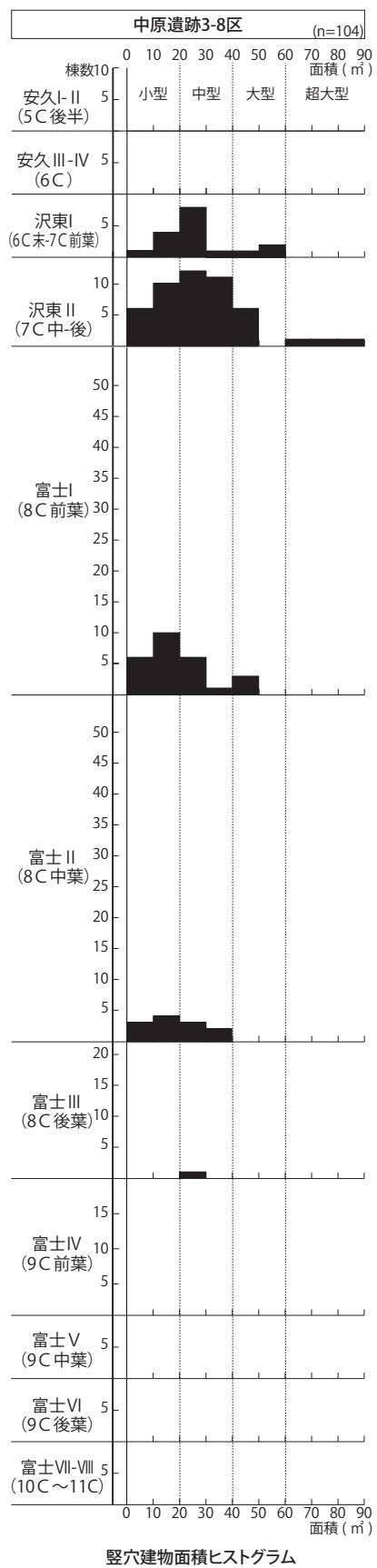
**中原遺跡の集落構造** 中原遺跡は駿河湾沿岸部の田子の浦砂丘上、浮島沼に面して立地する集落跡であり、これまでに250棟以上の堅穴建物が調査され、うち100棟強が報告されており、7世紀代における駿河東部地域を代表する集落の一つである（木村編2016）（第107・108図）。中原遺跡は堅穴建物の床面積についても、地域最大級の70～80m<sup>2</sup>台の超大型建物が継続的に営まれた同時期の富士山麓の拠点集落である沢東A遺跡と比べても遜色がない。また倉や大型の屋とみられる掘立柱建物も7世紀後半には登場していることから、駿河東部地域では非常に先進的で、上位階層の建物群も含む田子の浦砂丘上の拠点集落とみてよい（藤村2021c）。



第106図 愛鷹山古墳群周辺の特殊な装身具・銅製品



第107図 中原遺跡の集落変遷と主要遺物 (1)



第108図 中原遺跡の集落変遷と主要遺物 (2)

**手工業関連遺物と水産加工工具** 出土遺物についてみると、7世紀代には豊富な手工業関連遺物（砥石、紡錘車、ガラス小玉鋳型）や、各種鉄製品（鉄鎌、刀装具、馬具）、玉類などが出土するほか、8世紀代に鍛冶具（鉄鉗）や鉄滓といった手工業関連遺物のほか、銅製鉗具、分銅が出土し、少なくとも集落が拡大する7世紀代には駿河湾沿岸部における中心的な手工業生産拠点として機能したことが窺える。

さらに、7世紀代より鉄製釣針や大型土錐などの漁具のほか、回遊性魚類の煮炊き用とされる土師器壙（瀬川・小池 1990など）がまとまって出土している点も特筆される。7世紀代の土師器壙については、田子の浦砂丘上の柏原遺跡や浮島沼西部の宇東川遺跡F地区などでもその存在が確認でき、田子の浦砂丘を含めた浮島沼ラグーン周辺にこの時期に急速に受容された状況が推定される（藤村 2021a）。

以上の調査成果から、中原遺跡の性格としては、水産・加工業に加え、全国的にも極めて珍しいガラス小玉生産を筆頭に、鍛冶や製糸・布生産なども担う、複合的な手工業生産・水産加工拠点集落として評価できる。

**稚贊屯倉と砂丘上の集落群** このような田子の浦砂丘上の集落を評価する上で見過ごすことのできないのが、稚贊屯倉の問題である。『日本書紀』に登場する稚贊屯倉は、現在の田子の浦港から沼川周辺に7世紀前半頃に設置された、上宮王家（聖徳太子の一族）への堅魚製品の貢納拠点とみる説が有力であり、漁具や水産加工工具が集中する中原遺跡の特徴とよく合致する。仁藤敦史氏は早くに、稚贊屯倉を「大王への大贊と対応し、有力な皇子（稚・ワカ）へ貢納物（贊・ニエ）を献上するために設定された屯倉」とし、「原初的なミツキ・ニエとして堅魚製品が（上宮王家へと）貢納された段階」に機能したことを推定した（仁藤 1996）。また、原秀三郎氏は稚贊屯倉を壬生部や膳氏といった上宮王家との関わりが深い集団によって駿河・伊豆の聖徳太子領の調物である荒堅魚を集積した交通拠点（倉庫施設）と捉え、潤井川と沼川の河口部、現在の田子の浦港東岸あたりに比定する（原 2005）。

**王領の設置と大型群集墳** 田子の浦砂丘上の複合的な手工業生産・水産加工拠点である中原遺跡周辺

の調査成果によって、文献史学において重要視されてきた稚贊屯倉をはじめとする上宮王家関連伝承地との具体的な比較検討が出来るようになった点は大きいに特筆される。砂丘上の一連の集落が、吉原津（現田子の浦港）の港湾施設と水運のみならず、砂丘上に想定される街道を通じて連結していたことも十分考えられよう（第97図）。そして、中原遺跡の高度な複合的生産集落が、浮島沼ラグーン沿岸の「王領」化の産物の一つであったとすれば、同集落から浮島沼を挟んだ対岸に展開した愛鷹山古墳群に葬られた集団こそ、まさにその王領を現地で経営した共同体構成員やその指導者層であったとみなせる。愛鷹山古墳群と浮島沼ラグーンは、東海における大型群集墳の偏在性と「王領」（中井・鈴木一編 2008）の観点からも、重要なモデルになり得る地域といえよう。

## (2) 浮島ヶ原ネットワークと新しい陸上交通網

**浮島ヶ原ネットワーク** 佐藤祐樹氏が当地域の前期古墳を説明する上で提示した「浮島ヶ原ネットワーク」は、「（浮島沼）ラグーンの管理とその内海を中心として甲斐や相模へと続く路の中継地の管理などを通じて密接な関係を築いていた首長同士の繋がり」を指す（佐藤 2018）。古墳時代前期のそれは、外洋と接続する吉原津（現田子の浦港）から、浮島沼ラグーン各地を結ぶ水運（渡井英 2021）と、そこを起点とする北方や東方への陸路とのターミナル機能が重視されたネットワークであったといえる。

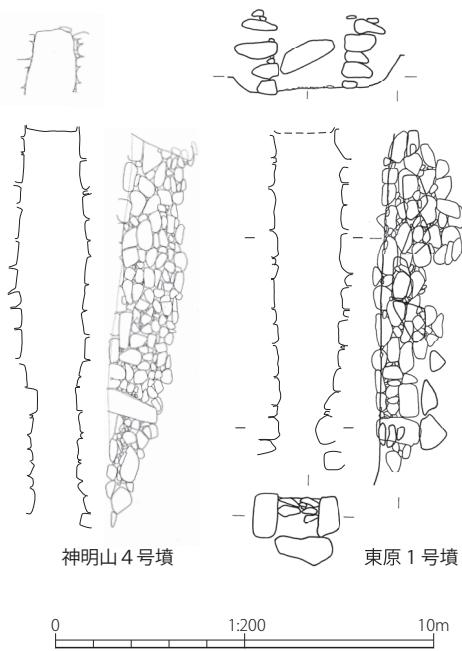
後期前半に浮島沼ラグーン周辺に並立する中小規模の首長墳は、古墳時代前期的なネットワークの再興を象徴する景観を古墳によって示していたことが想定される。それが、後期後半から飛鳥時代になると、田子の浦砂丘上に直線的に並ぶ集落景観が誕生する点に、前代からの大きな飛躍を見てとることができる。砂丘上には、古代・近世に東海道が敷設されることから、7世紀に大規模に展開した砂丘上の集落が、後の東海道設置への布石となっていた点も大きいに想定される。

**馬による陸上交通網の整備** 田子の浦砂丘東側の前期の有力な首長墳である神明塚古墳の周囲には、6世紀以降に松長古墳群が展開する。30基以上の円墳で構成された古墳群のうち、発掘調査された松長

6号墳では、愛鷹山南麓の吹上2号墳と同大の平面企画とみられる狭長形の横穴式石室から、補修痕のある金銅装内湾構円形轡とイモ貝装辻金具からなる馬具や大刀、20本程の鉄鏃などが出土した（池谷・北 2015）。一方、愛鷹山南麓に位置する荒久城山古墳でも金銅装の十文字構円形轡と剣菱形杏葉のセットが出土しており、6世紀後葉（TK43型式併行期）に浮島沼ラグーンの南北で金銅装の馬具を保有する有力層が生まれている点は重要である。この段階に、駿河東部地域において新来の馬を利用した陸上交通網の萌芽をみとめることができる。

続く6世紀末～7世紀中頃には愛鷹山古墳群は最盛期を迎える、大型矩形轡や鉸具造轡の普及・集中のほか、馬具の補修事例も増加し（本書大谷論考）、愛鷹山麓への馬牧の設置（大谷 2019）も推定される。この段階に新しい通信・運輸・軍事手段として、馬の本格的な導入と陸上交通網の整備が進んだとみられる（松尾 2002、滝沢 2022）。富士川流域から狩野川流域へ至る主要な陸路には、吉原津と狩野川河口部を結び、中原遺跡などの新興集落群が展開した田子の浦砂丘上の街道が選ばれたとみてよい。

**浮島沼ラグーンを通じた水陸交通の結節** 以上の検討から、古墳時代後期に再興された水運ベースであった浮島ヶ原ネットワークに、後期末から飛鳥時代に甲信・相模方面への馬が発着する高速陸上交通網が接続したこと、両交通網のターミナルとして浮島沼ラグーン地帯の重要性が改めて高まることとなつたと考えられる。駿河中部地域から東部地域への運送手段としては、陸路は薩埵峠などの難所が存在することもあり、6・7世紀に至っても清水津一吉原津間の海路による沿岸航海が主流であった蓋然性が高い。清水津に近接する蘆原川河口部に7世紀前半頃に築かれた神明山4号墳の擬似両袖形石室は、愛鷹山南麓の東原1号墳の石室に類似する（第109図）。東原1号墳は両側壁の開口部付近に立柱石を有し、伊豆半島基部の立柱石を有する石室と同じく、駿河中部地域の擬似両袖形石室の影響を受けて設計されたとみられる。伊豆凝灰岩製家形石棺の狩野川河口部一駿河中部地域間の輸送ルート（菊池 2008）も含め、駿河中部と同東部・伊豆地域を結ぶ海上交通の重要性を示す事例と捉えたい。



第109図 駿河中・東部地域の擬似両袖形指向の石室

船津寺ノ上1号墳や吹上2号墳、松長6号墳などの狭長形石室の類例が相模川流域から東京湾沿岸に分布する点（井鍋 2003）も、愛鷹山古墳群の集団が太平洋沿岸の海上ネットワークに影響力を有していたことの証左とみられる。

## おわりに

**愛鷹山古墳群の被葬者集団** 些か雑駁ではあるが、浮島沼ラグーンを生産基盤とした集団の奥津城として愛鷹山古墳群を捉え直すことで、地域社会の変遷と大型群集墳の発生要因を検討した。

倭王権中枢へ海産物（贊）を貢納するための王領化に際し、水陸の新しい交通路の結節点として再整備が進められた浮島沼ラグーン周辺では、渡来人も参画した複合的手工業・水産加工拠点である中原遺跡などの砂丘上の集落を拠点に、馬牧の設置や古墳群造営を目的とした愛鷹山麓の開発が進められた。

また陸路で甲信・関東と繋がる軍事的要衝でもあったため、共同体構成員には武人としての役割も求められたことが古墳副葬品から窺える。

石室規模による階層構造からは、各共同体構成員の集団は、中型上位～大型石室の指導者層を上位とするタテの構造で統率されたことが明らかである。

ただし、集団同士は没交渉的なものではなく、石室平面企画の共有状況からは、墓域の異なる集団でも、古墳構築の際にはヨコ同士の活発な繋がりがあったことが推定された。このことは、集落などの生活域において、墓域の異なる集団同士が雑多に居住していた可能性も想起させる。

**千人塚古墳の被葬者像 須津古墳群のなかでは新興の墓域である神谷（須津）支群に位置する千人塚古墳は、全長 11.4 m 以上の大型横穴式石室を有し、その石室規模は富士山南麓の実円寺西 1 号墳、黄瀬川流域の原分古墳に匹敵する。金銅装毛彫馬具のセットを保有する千人塚古墳の主たる被葬者は、6 世紀末頃から 7 世紀中頃の駿河東部地域を代表する「3 強」の首長の一人であったことは疑いない。少なくとも、愛鷹山南麓を墓域とした集団のなかでは傑出した指導者であったとみられ、東海・関東の境界に設置された王領の現地経営や水陸交通の管理、軍備を担った地域首長として評価できるだろう。**

### 浮島沼ラグーン周辺のその後と古墳群の意義 7

世紀代に隆盛を極めた田子の浦砂丘上の集落は、8 世紀後葉から 9 世紀にかけてその規模を大幅に縮小させるが、貞觀 6 年（864）の柏原駅の廃止（『日本三代実録』）まで、古代東海道の重要な補給拠点として機能した。吉原津は中世に吉原湊（現田子の浦港）として一層発展し、近世の宿駅制度によって東海道が設置された後も、吉原宿の海の玄関口として、宿場とは常に水運で結ばれていた。水害などの影響もあり、地域の拠点となる場所は時代によって変化したが、港湾と内水運、そして街道（東海道）を基軸として展開する経済活動や生産基盤が、当地域の飛鳥時代以降の普遍的な特徴であったといえる。

愛鷹山麓に築かれた古墳群は、それ以後の地域展開の方向性を定めた画期となる記念碑として、末永く保存・活用していく必要がある。

### 謝辞

本稿執筆に際し、大谷宏治、小田裕樹、菊池吉修、庄田慎矢、滝沢 誠、三舟隆之、森川 実の各氏からご教示を賜った。なお本稿は、沼津市・富士市連携事業に際し、木村 聰、佐藤祐樹の両氏との有益な議論によるところが大きい。記して深謝いたします。

### 註

1 一方、富士市やその前身の吉原市の市史や発掘調査報告書では、一部の論稿を除き（木ノ内 1997）、市域外となる石川古墳群以東の古墳群を積極的に議論の遡上にあげることはほとんどなかった。想像をたくましくすれば、『静岡県東部古代文化総覧』をはじめ、広く県東部の考古資料を歴史的に評価しようとした小野眞一氏の問題認識（小野 1957a）や、同じく小野も関わった『沼津長塚古墳』における後藤守一氏の「スルガの国古墳群」といった古墳群の概念（後藤 1957）が、沼津市の報告書には長らくその根底に流れていた可能性がある。

2 本稿では、一部赤淵川の西岸に及ぶ鵜無ヶ淵・間門古墳群や富士岡古墳群のほか、浮島沼を挟んで対岸の田子の浦砂丘上に展開する東田子の浦砂丘 1 古墳群、松長古墳群も補足的にその範囲に含める。なお、木ノ内義昭氏も田子の浦砂丘上の古墳も含めた範囲で「愛鷹山南麓の古墳群」として捉えている（木ノ内 1997）。

3 富士郡の郡領氏族を輩出した集団の古墳群とみられる富士南麓の伝法古墳群では、副葬品内容から、一部の中型石室の被葬者が集団の最上位層を担っていた可能性がある。

4 『日本書紀』安閑天皇 2 年（535）5 月甲寅条に、諸国への屯倉の設置記事の末尾に、駿河国へ稚賀屯倉を置くとの記事がある。

### 参考文献

- 池谷信之ほか 1985 『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会  
池谷信之・北佳奈子 2015 『松長 6 号墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会  
尾上元規 1993 「古墳時代鉄鎌の地域性—長頸式鉄鎌出現以後の西日本を中心として—」『考古学研究』40 (1)、考古学研究会  
井鍋誉之 2003 「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会  
井鍋誉之 2006 「東駿河」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会  
井鍋誉之編 2008 『原分古墳』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所  
岩原 剛 2005 「東海地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財センター  
植山英史 2020 「相模地域における横穴式石室の受容と展開」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社  
内山敏行 2018 「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集（鈴木一有・田村隆太郎編『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊 30、雄山閣、2019 年所収）  
大谷宏治編 2010 『富士山・愛鷹山麓の古墳群』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

- 大谷宏治ほか 2010『秋葉林遺跡Ⅱ』(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2010a「副葬品からみた無袖石室の位相—東海～関東を中心に—」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
- 大谷宏治 2010b「古墳時代後期～終末期の古墳について』『富士山・愛鷹山麓の古墳群』(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2019「東海における古墳時代の馬文化の様相」右島和夫監修『馬の考古学』雄山閣
- 小野眞一 1957a『静岡県東部古代文化総覧』蘭溪社書店
- 小野眞一 1957b「スルガの国東部古墳群」『沼津長塚古墳』沼津市教育委員会
- 菊池吉修 2005『山麓の古墳と海辺の古墳』『沼津市史 通史編 原始・古代・中世』沼津市
- 菊池吉修 2010「駿河」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
- 木ノ内義昭 1997「須津のあけぼの」鈴木富男編『郷土誌 須津』富士市須津地区まちづくり会議
- 木村 聰編 2016『中原遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- 小崎 晋・北佳奈子ほか 2017『芝荒遺跡・芝荒古墳群』沼津市教育委員会
- 後藤守一 1957「スルガの国古墳群」『沼津長塚古墳』沼津市教育委員会
- 佐藤祐樹・若林美希編 2013『富士市内遺跡発掘調査報告書 一平成22・23年度』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹編 2016『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹 2018「駿河・遠江における古墳出現期の様相—浮島ヶ原における首長系譜を中心にして—』『東海地方における古墳出現期の様相2』第30回考古学研究会東海例会
- 静岡県 1930『静岡県史 第1巻』
- 静岡県 1990『静岡県史 資料編2 考古二』
- 静岡県 1992『静岡県史 資料編3 考古三』
- 白石太一郎 1973「大型古墳と群集墳」『考古学論叢』第二冊、奈良県立橿原考古学研究所(『畿内における大型群集墳の形成過程』『古墳と古墳群の研究』塙書房 2000年所収)
- 志村 博編 1981『横沢古墳・中原1号墳 伝法遺跡群(伝法A～E地区) 天間地区』富士市教育委員会
- 志村 博ほか 2003『花川戸第2・3号墳発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 杉山 満・大川敬夫 2002『神明山4号墳発掘調査報告書』静岡市教育委員会
- 鈴木一有 2001「東海地方における後期古墳の特質」『第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム
- 鈴木一有 2006「東海の馬具と飾大刀にみる地域性と首長権」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会
- 鈴木一有 2016「中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
- 鈴木一有 2017「東海地方における横穴系埋葬施設の多様性」『一般社団法人日本考古学協会 2017年度 宮崎大会 研究発表資料集』日本考古学協会 2017年度宮崎大会実行委員会
- 鈴木敏則 1988「まとめ」『半田山古墳群(IV中支群—浜松医科大学内—)』浜松市教育委員会
- 瀬川裕市郎・小池裕子 1990「煮堅魚と堀形土器・覚え書き」『沼津市博物館紀要』14、沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館
- 滝沢 誠 2022「愛鷹山麓の後期古墳を考える」『沼津市・富士市連携事業 愛鷹山に眠る開拓者たち—東海最大級の古墳群と地域の再生』講演会動画、沼津市教育委員会
- 滝瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号、PHALANX—古墳文化研究会—
- 鶴田晴徳ほか 2006『石川古墳群』沼津市教育委員会
- 富樫孝志 2010『の場古墳群・的場遺跡』(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 中井正幸・鈴木一有編 2008『東海の古墳風景』季刊考古学別冊16、雄山閣
- 中野国雄 1958「吉原市域の古墳—スルガのクニ西部地域古墳群—」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
- 仁藤敦史 1996「駿河・伊豆の堅魚貢進」静岡県地域史研究会編『東海道交通史の研究』清文堂出版
- 沼津市 2002『沼津市史 資料編 考古』
- 橋本英将 2014「金銅装頭椎大刀の佩用者と被葬者像」『兵庫県香美町村岡 文堂古墳』太田前大学史学研究所・香美町教育委員会
- 土生田純之 2010「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第65集、九州古文化研究会
- 早野浩二 2008「古墳時代の鉄鐸について」『研究紀要』第9号、(財) 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 原秀三郎 2005「王領の設置と壬生部・膳部」『沼津市史通史編 原始・古代・中世』沼津市
- 平林将信ほか 1986『富士市指定史跡 實円寺西古墳保存修理工事報告書』富士市教育委員会
- 平林将信ほか 1987『船津寺ノ上第1号墳 発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 藤村 翔・若林美希編 2011『平成13年度 富士市内遺跡・伝法 国久保古墳』富士市教育委員会
- 藤村 翔・石川武男編 2013『船津古墳群II』富士市教育委員会
- 藤村 翔 2013「柏原遺跡の調査成果」『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成22・23年度』富士市教育委員会
- 藤村 翔 2016「中原4号墳の横穴式石室とその歴史的意義」『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
- 藤村 翔 2017「駿河・伊豆地域における手工業技術の受容と集落動態—6・7世紀を中心に—」『東海における古墳

- 時代の手工業生産の展開を考える』考古学研究会東海例会『考古学研究会シンポジウム記録 12』考古学研究会、2021 年所収)
- 藤村 翔 2018a 「東平 1 号墳出土鉄鏃の評価と意義」『伝法 東平第 1 号墳』富士市教育委員会
- 藤村 翔 2018b 「遠江・駿河地域における群集墳分析の視角」『東海考古学展望』東海考古学展望刊行会
- 藤村 翔 2018c 「富士山・愛鷹山南麓の古墳群との形成と地域社会の展開』『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集（鈴木一有・田村隆太郎編『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊 30、雄山閣、2019 年所収）
- 藤村 翔 2021a 「駿河国富士郡における土師器の変遷—飛鳥時代から平安時代前半期を対象に—」『向坂鋼二先生米寿記念論集—地域と考古学 II』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会
- 藤村 翔 2021b 「横穴式石室からみた群集墳の集団原理—近江・畿内地域を中心に—」古代学研究会編『群集墳研究の新視角 群集墳からみた古墳時代の社会と集団』六一書房
- 藤村 翔 2021c 「駿河国富士郡域周辺における古代集落の構造と変遷』『古代集落の構造と変遷 I』第 24 回 古代官衙・集落研究会報告書、独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 松尾昌彦 2002 「古墳時代東国経営の諸段階」『古墳時代東国政治史論』雄山閣
- 松崎元樹 2001 「瀬戸岡古墳群の再検討」『東京都あきる野市天神前遺跡 瀬戸岡古墳群 上賀多遺跡 新道通遺跡 南小宮遺跡』東京都埋蔵文化財センター
- 渡井義彦 1988 『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』富士市教育委員会
- 渡井義彦 1999 『船津古墳群』富士市教育委員会
- 渡井英誉 2021 「潤井川流域における弥生～古墳時代の集落と墳墓の動態」『向坂鋼二先生米寿記念論集 地域と考古学 II』向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会

## 図の出典

- 第 97 図 赤色立体地図：国土交通省富士砂防事務所が取得した航空レーザ測量データ（平成 31 年度以前）から作成した 1 m DEM および日本水路協会「海底地形デジタルデータ M7000 シリーズ（M7001Ver2.3 関東南部）」を使用。赤色立体地図は、この DEM をもとにアジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許 3670274、特許 4272146）を使用して、アジア航測株式会社・千葉達郎氏が作成した。以上のデータを、静岡県富士山世界遺産センター（小林淳 教授）より本図作成のために提供頂いた。
- 地形図：国土地理院発行 電子地形図 25000  
なお、沼津市域の遺跡分布図は、沼津市文化財センターの木村聰氏より提供いただいた。
- 第 98・102・103 図 筆者作成
- 第 99 図 横沢古墳：志村編 1981（平面図再トレース）、実円寺西 1 号墳：平林ほか 1986、千人塚古墳・中里大久保古墳：本書、寺ノ上 1 号墳：平林ほか 1987、原分古墳：井鍋編 2008、赫夜姫 1 号墳・大坂上古墳：渡井 1988、石川 118 号墳・東原 1 号墳・吹上 1 号墳：沼津市 2002（石川 118 号墳、東原 1 号墳は平面図再トレース）、下土狩西 1 号墳：静岡県 1990
- 第 100 図 須津 J-118・6・159 号墳：大谷編 2010、中里大久保古墳・千人塚古墳：本書、大塚団地 1・2 号墳：渡井 1988
- 第 101 図 寺ノ上 1 号墳：平林ほか 1987、船津 L-208～216 号墳：渡井 1999、船津 L-62・207 号墳：藤村・石川編 2013
- 第 104 図 1・2：静岡県 1992、3・13：小崎・北ほか 2017、4・5・10・11・12：沼津市 2002、6：佐藤・若林編 2013、7：本書、8：大谷ほか 2010、9：滝瀬 1984 以上掲載図に一部加筆。
- 第 105 図 1：佐藤編 2016、2：藤村・若林編 2011、3：渡井 1988、4：静岡県 1930、5：本書、6：大谷編 2010、7：藤村・石川編 2013、8・9：鶴田ほか 2006、10：池谷ほか 1985、11：沼津市 2002、12：富樫 2010
- 第 106 図 1：中野 1958、2：渡井 1988、3・4・6・10：沼津市 2002、5：志村ほか 2003、7：須津某／静岡県 1992、中里道東／静岡県 1930、8・11：藤村・石川編 2013、9：平林ほか 1987
- 第 107・108 図 木村編 2016 を基に筆者作成。
- 第 109 図 神明山 4 号墳：杉山・大川 2002、東原 1 号墳：沼津市 2002